Institute for *YAMATO* and Kii Peninsula Studies, Nara Women's University (since 2018)

vol.6
2024

News Letter

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所

「リカレント教育プログラム」報告 【寺岡 伸悟】

【目 的】

大和・紀伊半島学研究所では、「総合流域学」のコンセプトに従い、河川流域を一つのまとまりとしてとらえ、その自然・環境的側面（共生科学研究センター担当）、歴史的側面（古代学・聖地学研究センター担当）、および人文・社会学的側面（なら学研究センター担当）について総合的に学ぶ「リカレント教育プログラム」を提供していくことを計画しています。 今年度は、東吉野村を舞台にして少人数による教育プログラムを試験的に実施し、今後に向けての基礎データを集めました。

今回はトライアル授業ということで、地元東吉野の方や研究所にゆかりのある自治体職員、さらに、研究者などに声がけをしました。奈良教育大学からも２名の教員が参加してくれました。

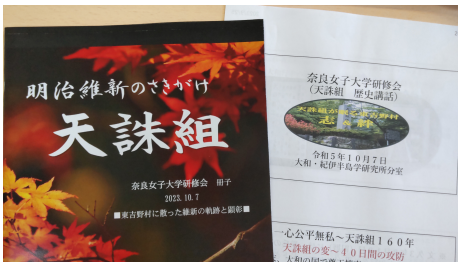
【プログラム】

①つくばね小水力発電所見学 ：つくばね小水力発電所を見学しました。同じ推力を用いるものの大規模なダムとは異なる特徴をもつ小水力発電の仕組みと利点と課題を学び、流域を通じた水力の有効利用や再生可能エネルギー全般について考えるきっかけとしました。取水口とオーバヘッドと発電施設の３箇所を見学し、自然からエネルギーが生み出されることを体感することができました。

②河川実習： 東吉野村旧四郷小学校近くを流れる四郷川にて自然河川の構造を観察し、環境計測を行い、そこに生息する生物を採集・観察・分類することで、河川が生み出す環境と生物の多様性について学びました。片野先生のわかりやすくて知的な説明を受けたあと、胴長を履いて、一同川に入りました。その段階で大人たちが大興奮。川の下にある水の流れを観察したり、水中生物を観察したり、本当にあっという間の時間でした。

TOPICS

・「リカレント教育プログラム」報告
・三郷町と協定を締結
・公募型一般共同研究 成果報告会の開催
・2023 年度 東吉野村野外体験実習 報告（共生）
・第 23 回共生科学研究センター
　シンポジウム報告（共生）
・第 24 回共生科学研究センター
　シンポジウム報告（共生）
・着任の挨拶（共生）
・第３回聖地学シンポジウム
　「宗教と利他性」の報告（古代）
・第 19 回若手研究者支援プログラムの報告（古代）
・令和５年度　古代学・聖地学研究センター
　主催シンポジウムの報告（古代）
・第 19 回若手研究者支援プログラム参加レポート
・なら学研究センターの活動報告（なら）
・2023 年度共同研究の紹介（なら）
・なら学研究活動報告（なら）



③天誅組：東吉野村旧四郷小学校に戻った一同は、歴史講話を受けました。地元郷土史家の先生が講師となり、幕末に挙兵した尊王攘夷派の武装集団「天誅組」は各地を転戦したのち、最終的には東吉野村鷲家口付近で壊滅しました。天誅組の蜂起とその後の軌跡を学ぶことで、当時の自然や社会、制度や思想について学びました。

④総合討論 ：上記の見学・実習・講義を通じて学んだ東吉野村における自然･環境や歴史、社会的な取り組みに関する知識に基づき､河川･流域とそれらが作り出す環境、社会、文化、歴史のかかわりについて考えました。まず共生科学研究センターの酒井センター長から、総合流域学とはなにか、またその理念を体現した今回のリカレント授業の主旨について説明が行われました。 その後グループに分かれて､全員で､今回のリカレント教育プログラムについて評価を行いました。最適人数について、また盛りだくさんなプログラムをどのように消化不良なく計画するか、ということについて、など多くの有益な議論がかわされました。最後には、研究所が用意した修了証が、古代学・聖地学研究センターの奥村センター長から受講者全員に手渡されました。

【日 時】

令和５年１０月７日（土）１０時３０分～１７時

【時間割】

10:40	開催挨拶、プログラム説明
10:45 ～ 12:20	①つくばね小水力発電所見学　（講師：大谷 彩貴氏　つくばね小水力発電所 職員）
12:20 ～ 13:20	昼食・休憩
13:20 ～ 14:50	②河川実習　（講師：片野 泉氏　奈良女子大学 教授）
14:50 ～ 15:00	休憩
15:00 ～ 16:20	③天誅組 歴史講話　（講師：桝本 君孝氏　東吉野村天誅組顕彰会 会長）
16:20 ～ 16:30	休憩
16:30 ～ 17:00	④総合討論
17:00	終了挨拶 アンケート等

三郷町と協定を締結

令和５（2023）年 10 月６日、「奈良県生駒郡三郷町と奈良女子大学との連携・協力に関する協定書」が締結されました。目的は、両者の密接な連携・協力により大学の「知」を活かし、地域の課題の解決、さらにまちづくり推進、大学の教育研究の充実発展に資すること、です。連携を行う事項は広範囲にわたりますが、「大和川地域の地域連携及び環境に関する事項」が謳われ、大学側の連携協力の窓口として、本研究所が明記されている点を紹介しておきます。

公募型一般共同研究 成果報告会の開催

令和６（2024）年２月 22 日午後、研究所の公募型一般研究の成果報告会が交流テラス（＋オンライン）で行われました。本研究所の公募型共同研究費を獲得している研究者のなかから、各センター２名、合計６名が研究成果報告を行いました。報告は､センター単位ではなく､「環境を知る」､「自然を守る」､「生活を作る」、の３グループに再構成して２名ずつ報告を行いました。

共生

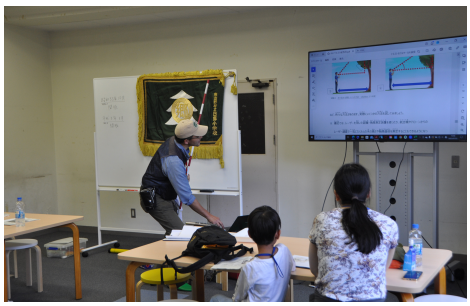
2023 年度 東吉野村野外体験実習 報告 【鎌倉 史帆】

第 1 回目の東吉野村野外体験実習は、7 月 22 日（土）に実施し、小学生 7 名、保護者 6 名、奈良女子大学からスタッフ 6 名、林業体験のスタッフ 8 名を加え、総勢 27 名で行いました。

はじめに大和・紀伊半島学研究所分室（旧四郷小学校）にてミニ講義を行い、草と木の違いや年輪のでき方、心材・辺材といった材木の構造などのトピックについて学習しました。参加者からは木は腐らないように木なりに頑張っているのだと分かったという声が聞かれました。

樹皮はぎの様子

次に林業体験場へ移動し、樹皮はぎとロープの結び方の実習を行いました。ザラザラした樹皮を竹べらで木の幹からはがしていくと、驚くほどしっとりと水分を含んだ、きれいな白色をした層が現れました。今回はがした樹皮は実際の製品に使用するのだと聞き、みな真剣になって取り組んでいました。一枚の大きな樹皮が取れたときには達成感がありました。また、先のミニ講義で習った年輪や心材・辺材を実際に見ることができました。ロープの実習では、もやい結びを習いました。もやい結びは、結びは強いけれどほどこうとすると簡単にほどくことができ、いろいろな場面で役に立ちそうです。もやい結びのことを「おやごろし」とも呼ぶそうで、なおのこと印象に残りました。また、木の幹の高いところにロープをかける方法も習いました。これがやってみると難しく、上手にできたときには「おおー！」と声が上がりました。



講義の様子

最後にふたたび分室に移動し、木の高さの測り方を学習しました。三角関数を使用すれば、自分から木までの距離と木の頂点を見上げる角度から木の高さを知ることができるということを体験しました。実際の高さをほぼ正確に当てることができた参加者もいました。あいにく土砂降りとなってしまい、本来予定していたドローンを使用した測定は行うことができませんでした。しかし、時間いっぱいまで長さや角度を測ったり筆算したりして、一生懸命取り組みました。

第 2 回目の東吉野村野外体験実習は、8 月 9 日（水）に実施し、小学生 13 名、中学生 2 名、保護者 10 名と、奈良女子大学のスタッフ 13 名を加えた総勢 38 名で行いました。四郷川での野外実習を行う予定でしたが、当日あいにくの増水のため、大和・紀伊半島学研究所分室での室内実習に変更となりました。

水生昆虫観察の様子

「川の生き物について学ぼう！」と題した実習では、スタッフが事前に四郷川から採集した水生昆虫や魚を観察しました。バットの中で動き回っている大小さまざまな昆虫を、丁寧に仲間分けしていきました。するどい観察眼で、葉にうまく隠れて生活している昆虫がいることにも気がつきました。また、水生昆虫にも肉食のものと草食のものがいることや、これまで地上で成虫の姿しか見たことがなかった昆虫の意外な幼虫期の姿など、新たな気づきや出会いが多くありました。最後は見つけた昆虫をみんなで報告し、同じ川でも深くて流れの緩やかなところと流れの急なところとで、住んでいる昆虫の種類が異なることを学びました。

顕微鏡観察の様子

次に「こんなところに！水中の小さな生き物を顕微鏡で見てみよう」と題した実習で、四郷川やそのほかの河川、池、海にすむ微生物を顕微鏡で観察しました。観察とミニ講義を通じて、水辺のヌルヌルした石の表面には、肉眼で見ることのできない単

細胞の藻類や、それらを食べて生活している小さな動物がたくさん生活していることを学びました。さらに、これらの微生物は水生昆虫や魚など、より大きな生き物が生きるための大事なエサとなっていることを学びました。時間いっぱいまで顕微鏡を真剣にのぞいて生き物を探し、環境によって住んでいる微生物の種類も異なることに気付きました。見つけた生き物でビンゴゲームにも挑戦しました。少し難しかったですが、ビンゴを達成できた参加者の方も多くいました。また、藻類の緑色や黄土色をした葉緑体を、色鉛筆を使ってとても上手にスケッチしている方もいました。不思議な模様をしたガラスの殻をもつ珪藻を見て、「これが藻なのですか？」と質問される場面もありました。

東吉野村野外体験実習は、来年度も安全性に最大の配慮をしつつ、内容を工夫しながら実施する予定です。

共生　第 23 回共生科学研究センターシンポジウム報告　【高田 将志】

2023 年 10 月 15 日（日）午後 1 時より第 23 回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウムを開催しました。当該シンポジウムは、第 27 回紀伊半島研究会のシンポジウムと共催で、テーマは「シカとオオセンチコガネのゲノム情報から奈良の森を考える」でした。奈良女子大学・総合研究棟文学系 S 棟・2 階 235 教室での対面方式と Zoom によるオンライン方式とをミックスしたハイブリッド形式で運営し、参加者は、会場（対面）36 名、Zoom オンライン 80 名でした。プログラムは以下の通りです。

【プログラム】
前迫ゆり（紀伊半島研究会会長）：開会挨拶と趣旨説明
高木俊人（福島大学大学院・理工）
「遺伝解析によって明らかとなった『奈良のシカ』の起源」
荒木祥文 (京都大学大学院・農）
「ルリセンチコガネを生み出したのは何か：ゲノム解析からわかったこと」
【パネルディスカッション】
兼子伸吾（福島大学大学院・理工）「コメント：DNA 解析が教えてくれる生き物の過去・現在」
立澤史郎（北海道大学大学院・文）「コメント：神鹿文化を支える『奈良のシカ』の生態特性」
討論：兼子伸吾、高木俊人、荒木祥文、立澤史郎、前迫ゆり
酒井　敦（奈良女子大学共生科学研究センター）：閉会の辞

前迫ゆり紀伊半島研究会会長の挨拶と趣旨説明につづき、講演者 1 番手の高木氏は、紀伊半島のニホンジカを対象とした集団遺伝解析から奈良のシカが独自の遺伝子型を持ち、それらは 1000 年以上も前に周辺地域のシカ集団から孤立したことを報告されました。また、奈良市内の局所スケールでのシカの遺伝構造解析からは、約 1000 年間維持されてきた集団が、近年になって奈良市外のシカと交流することで遺伝的な独自性が失われる可能性があることについてもコメントがありました。

2 番目の講演者である荒木氏からは、日本列島に生息するオオセンチコガネの中で奈良県や紀伊半島には全国的にも珍しい瑠璃色の地域集団が存在し、ゲノム解析の結果からみると、琵琶湖を挟んだ湖東・湖西に異なる赤色型集団が、湖南にこれら 2 つの集団とは異なる赤色型、緑色型、瑠璃色型の 3 つの集団が存在することが報告されました。そしてこれら 5 つの集団の分岐年代として、3830 年前、2086 年前、607 年前、195 年前という年代値が示されました。このような遺伝的分岐年代は、人為的影響による生息地の縮小・断片化など、人間社会の諸活動とその影響が大きく関係していることが指摘されました。

後半のパネルディスカッションの部では、まず、兼子氏から奈良のシカにまつわるゲノム解析と環境保全の観点から論点を整理いただき、つづく立澤氏から、社会・文化的背景も踏まえた奈良のシカの生態的特性に関して、豊富なフィールドデータを交えながら話題提供をいただきました。そして、高木、荒木の両講演者と、兼子、立澤の

両コメンテーターに前迫紀伊半島研究会会長を交え、学術的に明らかになってきた奈良のシカの特徴と、それも踏まえた保全に関して、さまざまな角度から総合討論を行いました。総合討論では、各講演者・コメンテーターに対して、かなり踏み込んだ多岐にわたる質問・コメントも寄せられましたが、執筆者としましては、兼子氏の「奈良のシカをめぐる、過去 1000 年スケールで築かれてきた生物・生態・歴史・文化など多様な視点からの特徴を知り、尊重する。その上で、持続可能な環境保全の枠組みを作る必要がある。」、「自然の営みなので焦る必要はないが、何をどういう経緯で決定したか、その結果何が起こったか、を克明に記録する必要がある。それが我々の最低限の責任ではないか。」という指摘が特に印象に残りました。また、会場からの質問・コメントに応答する形で、立澤氏が、「“**市民を巻き込む活動**” に関しては学術的な調査・研究に市民が “**協力する**” だけではなく、市民が主体的に“**分析･考察して提言する**“ところまで関わる必要があるのではないか。」とコメントされたのも印象に残りました。

今回のシンポジウムでは、奈良のシカとルリセンチコガネを核として、生態系の保全といった観点からの「奈良のシカ」の問題を、ゲノム情報を用いた最新の研究成果と、生態学的フィールド調査や歴史・文化的視点からの情報を含めて考えるという、斬新で有意義なシンポジウムになったように思います。奈良女子大学共生科学研究センター運営委員会 / 紀伊半島研究会事務局の一員として、シンポジウムの企画・運営でお世話になった皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

共生　第 24 回共生科学研究センターシンポジウム報告　【鎌倉 史帆】

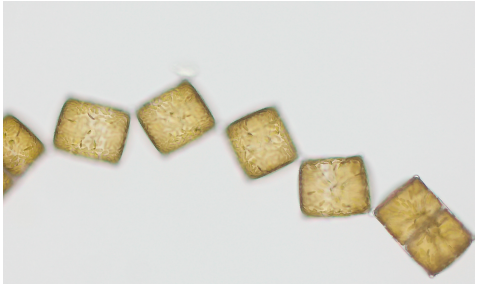
共生科学研究センターは 2023 年 12 月 9 日 (土)、「光合成をめぐる共生・寄生・三者関係」と題するシンポジウムをオンラインで開催いたしました。本シンポジウムは紀伊半島研究会と大和・紀伊半島学研究所との共催で、学内外から 56 名が参加しました。

酒井敦センター長の開会挨拶に続いて、5 名の研究者に最新の興味深い知見を提供していただきました。河野恵美子氏（総合研究大学院大学）からは、藻類と菌類の共生系として知られる地衣類において、新たな共生パートナーとして近年明らかになりつつあるバクテリアとの関係についてご講演いただきました。佐伯和彦氏(基礎生物学研究所）からは、マメ科植物と共生する窒素固定バクテリアである根粒菌について、その進化や、共生に関連した遺伝子群が獲得・喪失される機構についてご講演いただきました。辻田有紀氏（佐賀大学）からは、菌類に寄生し、光合成をやめるようになった植物について、その特異な進化過程についてご講演いただきました。畫間敬氏（東京大学）からは、植物と共存する糸状菌が、環境条件によって植物の成長を促進も阻害もしうるということや、その共生⇔病原の切り替えを制御する分子機構の研究についてご講演いただきました。吉田聡子氏（奈良先端科学技術大学院大学）からは、他の植物に寄生する寄生植物と、寄生される宿主植物、さらにそれらに感染する菌根菌の関係についてご講演いただきました。総合討論では活発に質疑応答が交わされ､研究の今後の展望などにも話が広がりました。講演と討論を通じて、植物が他の生物と築いている共生・寄生関係の複雑さや奥深さの一端がよく分かりました。また、新奇の共生関係を解明するうえで、次世代シーケンス技術にもとづくゲノム / メタゲノムおよびトランスクリプトーム解析といった手法が非常に強力な手段であるということも印象的でした。最後に、前迫ゆり紀伊半島研究会会長の閉会挨拶をもってシンポジウムを終了いたしました。

共生　着任の挨拶　【鎌倉 史帆】

2023 年 4 月より共生科学研究センターの非常勤研究員として着任した鎌倉史帆と申します。私は学部生の頃より、福井県立大学の海洋生物学研究室で珪藻の研究を行ってきました。珪藻は 10 万種近く存在すると考えられている単細胞の藻類で、熱帯～極域の淡水～海水まで大抵の水のある環境に生育しています。珪藻は水圏生態系の一次生産者として重大な地位を占めており、また私たちにとって非常に身近な存在ですが、その生態は未だ多くの謎に包まれています。私はとくに珪藻の培養と顕微鏡観察、分子生物学実験にもとづいて、珪藻の有性生殖、細胞内

共生、細胞壁の形態形成といったトピックに注目して研究を行ってきました。これらを手掛かりに、珪藻とはどういう生き物か、そして珪藻がどのようにしてこれほど多様化したのかについて迫りたいと考えています。研究材料としての珪藻の良いところ・面白いところは、あらゆる場所からあらゆる種が手に入る点だと思います。着任直後からさっそく近辺の池や川に出かけて珪藻を採集し、現在その培養実験を進めているところです。先生方やスタッフのみなさま、学生の方々には、研究やセンターのイベントでいつも本当にお世話になっております。精進していく所存ですので、今後ともよろしくお願いいたします。



培養中のジグザグオオメダマケイソウ
珪藻は黄色～茶色みがかった葉緑体をもつ。細胞が連なって巨視的な群体を形成することもある。

古代　第３回聖地学シンポジウム「宗教と利他性」の報告　【奥村 和美】

2022 年度聖地学シンポジウムを、2023 年 3 月 29 日 (水) にオンライン形式にて開催しました。テーマは「宗教と利他性」です。聖地は宗教と深く結びついています。多くの宗教は、利他性を思想の重要な核に据えています。今回の聖地学シンポジウムは、そのような「宗教と利他性」について根本的かつ歴史的な議論を展開しました。20 名参加でした。

日　時　令和５年３月 29 日 (水）　13 時 30 分～ 17 時
講　演　自利が利他になるとき―大仏造立
　　講　師：奈良女子大学特任助教　　斉藤　恵美
　歴史における利他性について
　　講　師：奈良女子大学教授　　西谷地晴美
　　コメンテーター：奈良女子大学准教授　　村上麻佑子

古代　第 19 回若手研究者支援プログラムの報告　【奥村 和美】

2023 年度第 19 回「若手研究者支援プログラム」を、8 月 28 日 (月) に対面形式にて開催しました。科学研究費基盤研究Ｂ「敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の展開」（代表：信州大学 西一夫）・同基盤研究Ｂ「平安期における古代漢文学の質的変容解明にむけた空海作品からのアプローチ」（代表：筑波大学 谷口孝介）・同基盤研究Ｃ「歌における説話的意匠の形成」（代表：淑徳大学 白井伊津子）より共催を得ました。

今回のテーマは「下級官人の文学」です。上代から平安時代にかけての下級官人の実態とそれら下級官人と周辺の人々を中心に形成される文学の諸相とを学ぶことを目的としました。歴史学分野では虎尾達哉氏、国語学分野では桑原祐子氏、国文学・比較文学分野では三木雅博氏に講師をお願いし、それぞれのご専門の立場から下級官人をめぐる諸問題についてお話しいただきました。なお、各講演の後に、あらかじめ指名した若手研究者数名に質問をしていただき、質疑応答を通してさらに考察を深めました。60 名参加でした。

日　時　令和５年８月28日（月）　10時30分～17時
講　演　古代下級官人の実態　　講　師：鹿児島大学名誉教授　　虎尾　達哉
下級官人の文筆の諸相　―正倉院文書の場合―　　講　師：奈良学園大学名誉教授　桑原　祐子
上代における一般識字層の漢文作品の特質　―「那須国造碑」の表現を通して―
講　師：梅花女子大学教授　　三木　雅博
司　会：奈良女子大学教授　　奥村　和美

古代　令和５年度 古代学・聖地学研究センター主催シンポジウムの報告　【大賀 克彦】

古代学・聖地学研究センター主催シンポジウム「勾玉談義　―考古学から見たその妙なるモノの歴史―」を11月18日（土）に、対面方式によって開催いたしました。

勾玉と呼ぶことができる装飾品は、今から約7000年も前の縄文時代前期には存在しており、そこから現在に至るまでの極めて長い歴史を持っています。勾玉と呼ばれる装飾品をこれほど長期にわたって愛用し続けたことは日本列島の歴史の大きな特色の一つです。

今回のシンポジウムでは、近年の考古学研究の進展に基づいて、勾玉の中の多様性や盛衰を整理し、それでもなお一つのモノとしての同一性を認め得るか、問い直すことを目的としました。縄文時代から古墳時代の勾玉に関する専門的な研究を行っている講師によって、それぞれ40分ずつの御報告を頂いたのち、最後に約60分間の総合討論を行いました。時間が限られていたことから、討論は田村朋美（奈良文化財研究所）および大賀克彦が司会を担当し、勾玉の存在がやや希薄となる時期についての理解を中心に、それぞれの講師の見解を確認することに論点を絞って進めました。ただし、古代以降、現代に至るまでの連続性に関しては、今後の重要な課題として残されました。参加者は48名でした。

日　時　令和５年11月18日（土）　10時～16時30分
講　演　勾玉の出現について　　川崎　保（長野県埋蔵文化財センター）
縄文時代後晩期の東日本の勾玉の系統　　森山　高（春日部市教育委員会）
弥生勾玉の成立過程　　大賀克彦（奈良女子大学）
翡翠製丁字頭勾玉の成立と意義　　谷澤亜里（奈良文化財研究所）
古墳時代における琥珀製勾玉の基礎的研究　　公門杏実（同志社大学）

古代　第19回若手研究者支援プログラム参加レポート　【沼野 月子】

2023年度若手研究者支援プログラムは下級官人の文学がテーマとなっており、研究者の方々のご講演を拝聴できる機会となりました。古代の下級官人がどれほどの実務や読み書きの能力を有しながら業務を行っていたのか、史資料に基づく見解が提示されました。支援プログラムを通じて、従来まで筆者が抱いていた古代官人の世界は、無意識のうちに現代的なイメージが多分に入り込んでい たことに気付かされました。

私が専攻する考古学の研究対象はモノを中心としますが、文字の登場する古代以降において文字資料は無視できない存在となります。人による使用や消費を経て発掘成果として現れるモノの経緯を検討する上で、出土する背景に当該期の社会情勢や政治、経済のシステムを想定しておかなければなりません。例えば律令期における物品の運搬状況を考える際には、『延喜式』にみえる貢進物や荷札木簡などが具体的な産地名や年代を示すことがあります。

しかしながら、文字資料の内容が現実に即したものであったのか注意する必要はあるようです。このように考えたのは、虎尾氏による古代下級官人の就業実態に関する講演内容がきっかけでした。例えば、『続日本紀』大宝元年には「文物の儀ここに備われり」とあり、朝賀儀が滞りなく実施されているかのような記述がなされています。

しかしながら虎尾氏は、制裁を含めた法令の変遷などから儀式への無断欠席が横行していた状況を示し、『続 日本紀』を額面通り受け取ってはならないとしました。定められた法令が遵守されていたのか、文面のまま理解すれば官人は厳格な管理のもと職務に当たっていたような印象を受けます。実際には、現代のような勤勉を美徳とする社会規範は当時まだ整えられておらず、職務怠慢に対する国家の対応も寛容であったことが虎尾氏により指摘されました。講演では、律令期における下級官人の性向として、非勤勉性、尊皇意識の希薄さ、守旧性の強さ、実利志向性が主張されました。従来までイメージしていた天皇を畏れる官人像も近現代的な考えに囚われたものであったことに気付かされました。

支援プログラムでは、講演者の各専門分野から、下級官人の勤務や文書作成の事態、漢文作品の様相が直近の研究動向と合わせて提示されました。桑原氏による正倉院文書を事例とした書類作成の実態では、文書のフォーマットを踏襲する意識が見られながら、単語や漢字表記の意味を詳細に理解していたのか疑問が呈されました。請暇解と不参解の誤用や頻出する漢字・常套表現は、下級官人の文書作成能力や学習の努力がうかがえます。三木氏による、一般 識字層の漢文作品に関する講演では、漢文世界の担い手として下級官人だけでなく僧侶の存在にも視点が向けられました。また、一般識字層と一言で言っても上級官人と地方官人とでは、漢文造詣の深さや韻の巧みさなど漢文を扱う能力差があり、教育環境の差異が示唆されました。

今年度の支援プログラムでは下級官人の文学がテーマとなっており、下級官人の読み書き能力がどのように身に付けられたのか、講演を経たことで共通する課題として呈されました。下級官人は怠慢な勤務実態が指摘された一方で、文書作成を可能とする一定の能力は有していました。下級官人たちは、任官以前にどのような教育システムのもとで読み書き能力を身に付けたのでしょうか。三木氏の指摘するように、僧侶による寺院での教育システムが存在した 可能性は、国家運営における寺院との関係をより意識させられる内容でした。史資料を扱う研究分野では、公的な文書では表されない部分に不透明な官人の実態が多く存在するように思われます。

下級官人の怠慢な勤務実態と関連して、平城宮造営の遅れや戸籍作成の遅れなど職務の遅延に関するご質問にも回答を頂けました。以前より私が個人的に引っかかっていた国家事業の緩慢さは、随所に事例が散見されるそうで、官人を咎めるはずの国家が寛容であった実態と合致します。考古学や歴史学は過去を対象とする研究分野であり、現代とは異なる社会規範のなかで生活が営まれてきました。過去を復元しようとする際に現代的な物差しが入り込んでいないか、今一度自身の身を引き締めたいです。

参考文献　　虎尾達哉 2021『古代日本の官僚』中公新書

なら　なら学研究センターの活動報告　【寺岡 伸悟】

1．教育的・社会的活動

自然・歴史文化・現代社会の３つのつながりを有機的循環的に学ぶ総合流域学をたちあげた本研究所にあって、なら学研究センターは現代社会の視点から自然や歴史文化との不可分のつながりを可視化し、研究所の発展と奈良地域の発展に寄与しています。本年度の活動もこの言葉に集約されるでしょう。

＜教育的活動＞

・文学部なら学プロジェクトと連携し、COC ＋の成果を継承して、全学向けに「なら学」「なら学＋」という２つの授業を実施しています。株式会社奈良ホテル、株式会社イムラ、ヨシリツ株式会社、株式会社墨運堂、株式会社創喜、株式会社池利、株式会社鞄工房山本、DMG 森精機株式会社、奈良県農業研究開発センター、奈良県薬事研究センター、社会福祉法人奈良県社会福祉協議会、奈良県、下市町などからゲスト講師が直接教室に足を運び 200 名ほどの学生と対話的授業をおこなってくれました。

・さらに令和５年度は下北山村と大学を結ぶキャリアデザインゼミナール（通称「下北山学」）も前期に開講しました。

・また下市町でのサービスラーニング授業の実施も支援しました。

＜社会的活動＞

・奈良県を代表し全国に読者がいる地域文化誌『月刊大和路ならら』に、「続・続大学的ならガイド」として連載し、広く社会になら学センターの研究成果を公開していますが、本年度で 100 話を迎えることとなりました。

・奈良国立大学機構奈良カレッジズ連携推進センターとの連携の下、上記の学び合いの新しい総合知プラットフォーム「奈良型エクステンション」を 3 町村で本年度から実施しています。その結果各自治体と在籍企業、大学との連携が強化され、共同研究、授業の新設、地域づくり協議会への大学の参画などの成果が現れています。

・昨年度から引き続き大淀町花岡家の史料整理協力に加えて、本年度から、奈良市田原公民館に残された地域新聞史料の整理協力を開始しました。

2．他機関との連携

・協力研究員がいる大淀町は文化振興事業に本センター教員 2 名が協力しています。10 月に研究所として実施した東吉野リカレントの際には、協力研究員であるコンサルティング企業の研究員が事業評価コメントを述べました。

3．研究活動

・なら学研究会の実施と上記『ならら』への研究成果公開に加えて、奈良県内地域との共同研究のかたちで複数の地域の課題解決や振興に研究面から協力をおこなっています。

なら　2023 年度共同研究の紹介　【水垣 源太郎】

2023 年度は 2 件の共同研究を実施しました。 1 つは、高取町社会福祉協議会との「高齢化するコミュニティの課題解決に向けたアクション・リサーチ」、もう 1 つは下北山村との「下北山村の人口動態と人口推計」です。いずれも 2021 年度から継続している共同研究です。

高取町との共同研究では、2022 年度までに行った 3 地区でのワークショップの成果を踏まえ、今後の多世代交流と地区間交流の仕掛けづくりとして、軽スポーツ（ボッチャ）の普及に力を入れました。その実装を高取町社会福祉協議会が引き継いだ結果、ボッチャは当初の 3 地区以外にも展開しています。また年度後半には、地域が抱える生活課題（買い物支援、ひきこもりの人の“はたらく”場づくり、ボランティア参加の仕掛けづくり）を企業や起業志望者で考えてもらう「地域課題型リカレント研修」を実施する予定です。さらにこの共同研究から派生した教育的成果として、高取町、下市町両町の地域的ニーズを踏まえた観光提案を行い、各町観光ガイド相互の地域間交流を創出する「サービス・ラーニング型」授業を展開しました（コミュニティ・リサーチ、コミュニティ・アクション）。

高取町 A 地区でのボッチャ教室の様子

高取町下市町観光ガイドの相互交流の様子

下北山村との共同研究では、「下北山村地方創生総合戦略」の改訂版の作成に向けた、将来人口推計と人口目標の設定を最終目標としています。2022 年度までに実施した人口移動分析や、医療関係者・高齢者へのインタビューを踏まえ、今年度は、下北山村出身の他出者を対象として、実家へのソーシャル・サポート、将来の帰郷や資産管理に関する調査を実施しています。これらの成果に基づいて、小規模レベルの将来人口推計モデルを開発し、目標設定を行う予定です。

なら　なら学研究活動報告　【磯部 敦】

■下北山村教育委員会との共同研究

今年度、下北山村教育委員会と共同で「下北山村歴史民俗資料館所蔵資料の整理と検討についての共同研究」をおこなっています。奈良女子大学より磯部敦と寺岡伸悟、下北山村より教育委員会の山本晃次朗氏と、地域おこし協力隊で下北山村歴史民俗資料館勤務の松村奏子氏の４名で組織されています。

本研究は、下北山村歴史民俗資料館所蔵資料の管理・把握・劣化防止のための資料調査と今後の保存・活用について検討するものです。6 月 17 日・18 日に磯部と寺岡とで資料館を訪問し現状確認をおこない、その後、9 月 12 日～ 15 日にかけて学生アルバイト 3 名、磯部、寺岡の計 5 名で先方に赴き、未整理史料の撮影をおこなってきました。その後、未整理史料を借り出し、奈良女子大学で撮影を継続しています。

■なら学研究会

2023 年 9 月 10 日（日）、安田真紀子氏（奈良からくりおもちゃ館館長、奈良大学講師）を講師として、第 37 回なら学研究会「近世大和に存在した観光案内人」を開催しました。オンラインでの実施で、参加者は 20 名でした。

古代にくらべて研究蓄積の少ない近世大和の歴史。そのなかで、奈良町を中心として案内を行った人々、大和の大社寺を起点として案内した人々、さらに、伊勢詣の人々の大和巡りを荷持ちを兼ねて付き添い、吉野・高野をへて大阪まで案内した人々の生態について講演いただきました。具体的な内容等については、なら学研究会ブログにて紹介しています。

■なら学史料撮影

学生アルバイト 2 名を雇用し、なら学に関する史料を撮影しています。今年度は、

（1）花岡大学旧蔵雑誌、書簡
（2）前登志夫創作ノート
（3）田原地区で発行されていた『月刊田原』

を撮影しています。

（1）（2）は終了し、ウェブ公開の方法や問題点の抽出をおこなっています。

（3）については、8 月 30 日に研究会メンバーで田原地区公民館を訪問し、史料の現状確認と今後の調査について館長らと打ち合わせをおこないました。その後、この打ち合わせをふまえて史料を借り出し、現在撮影中です。

■前登志夫生家の訪問調査

前登志夫（1926-2008）の旧蔵書籍や書簡類が、下市町清水の生家で没後そのままの状態になっていることから、10 月 1 日に磯部が前家を訪問し、現状を確認してきました。その際には、前登志夫が立ち上げた短歌同人「ヤママユ」から喜多弘樹氏と萩岡良博氏も参加され、前登志夫旧蔵史料の保存や整理についての話し合いもおこないました

前登志夫旧蔵史料等については、磯部が中心となって整理をおこなうことになったほか、蔵書の一部は峠の学び舎にある前登志夫研究室（前登志夫著作を並べた図書室）に寄贈することなどが検討されています。

研究所の活動状況（2023 年度）

シンポジウム等

◎聖地学シンポジウム（古代）
テーマ：「宗教と利他性」
日時：2023 年 3 月 29 日（水）
場所：オンライン形式

◎第 19 回若手研究者支援プログラム（古代）
日時：2023 年 8 月 28 日（月）
場所：文学部 N 棟 202 教室

◎第 37 回なら学研究会（なら）★
日時：2023 年 9 月 10 日（日）
講演：「近世大和に存在した観光案内人」
安田真紀子氏
（奈良からくりおもちゃ館館長）

◎第 23 回共生科学研究センターシンポジウム（共生）
日時：2023 年 10 月 15 日（日）
場所：奈良女子大学文学部 S 棟 235 教室
および オンライン（ZOOM）
テーマ：「シカとオオセンチコガネのゲノム情報
から奈良の森を考える」

◎古代学・聖地学研究センターシンポジウム（古代）★
日時：2023 年 11 月 18 日（土）
場所：理学部 G 棟 201 号室
テーマ：勾玉談義
ー考古学から見たその妙なるモノの歴史ー

◎第 24 回共生科学研究センターシンポジウム（共生）★
日時：2023 年 12 月 9 日（土）
場所：オンライン（ZOOM）
テーマ：「光合成をめぐる共生・寄生・三者関係」

開講科目

◎共生科学 (共生)
◎共生科学セミナー (共生)
◎共生科学特別演習 (共生)
◎地域探究実践演習 (共生)
◎歴史学実習 (古代)
◎「奈良」女子大学入門 (古代)
◎古代学・聖地学セミナー A(古代)
◎なら学 (なら)　◎なら学＋ (なら)
◎なら学実習 (なら)　◎なら学演習 (なら)
◎コミュニティ・リサーチ（なら）
◎コミュニティ・アクション（なら）
◎キャリアデザインゼミナール C77(下北山学)(なら)

地域連携事業

◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習（7 月）」（共生）
日時：2023 年 7 月 22 日（土）
場所：東吉野村

◎小中学生対象「東吉野村野外体験実習（8 月）」（共生）
日時：2023 年 8 月 9 日（水）
場所：東吉野村

センター主催セミナー

◎ 2023 年度第 1 回（通算 31 回）
共生科学研究センターセミナー（共生）
日時：2023 年 6 月 30 日（金）
場所：A204 およびオンライン（ZOOM）
（関係者限定）
ショートトーク：
「共生科学研究センター内部共同研究と「総合流域学」を軸とする教育共同利用拠点認定に向けた申請について」
酒井　敦
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
「奈良エクステンションとリカレント教育について」
酒井　敦
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
「カーボンニュートラルに向けての取り組みの現状報告」
村松　加奈子
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
主講演：「培養実験を通じた珪藻の生活史研究」
鎌倉　史帆（共生科学研究センター）

◎ 2023 年度第 2 回（通算第 32 回）
共生科学研究センターセミナー（共生）★
日時：2023 年 10 月 6 日（金）
場所：オンライン（ZOOM）
ショートトーク：
「奈良県森林総合監理士会「奈良フォレスター通信」に寄稿しました。カーボンニュートラルと林業～奈良県県有林の調査結果から思うこと～」
村松　加奈子
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
「共生科学研究センターの活動について（報告）」
酒井　敦
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
主公演：「生命の島に生きるヤクシマザルの営み」
辻野　亮氏
（奈良教育大学　自然環境教育センター）

◎奈良徳島県人会による特別講義（東大寺と県人会による郷土芸能をとおした交流）（なら）★
日時：2023 年 11 月 10 日（金）
場所：奈良女子大学

◎ 2023 年度第 3 回（通算 33 回）
共生科学研究センターセミナー（共生）
日時：2023 年 12 月 15 日（金）
場所：G302 およびオンライン（ZOOM）
（関係者限定）
ショートトーク：
「共生科学研究センター活動報告：授業科目の提供」
酒井　敦
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）
主公演：「レドックス微生物生態学：これまでの理論研究とこれからの応用研究に向けて」
瀬戸　繭美
（共生科学研究センター、研究院自然科学系）

◎ 2023 年度第 4 回（通算 34 回）
共生科学研究センターセミナー（共生）
日時：2024 年 3 月 1 日（金）
場所：Z306 およびオンライン（ZOOM）
武藤教授退職記念セミナー

センター共催セミナー

◎共生科学研究センター 2023 年度第 1 回
臨時セミナー（共生）★
日時：2023 年 5 月 19 日（金）
場所：奈良女子大学理学部会議室
およびオンライン（ZOOM）
講演：「陸上植物の多様性をどう理解するか」
長谷部　光泰氏（基礎生物学研究所）

◎共生科学研究センター 2023 年度第 2 回
臨時セミナー（共生）★
日時：2023 年 10 月 8 日（日）
場所：記念館講堂およびオンライン（ZOOM）
テーマ：サイエンスドキュメンタリー映画「アリの王国」上映とパネルディスカッション
プログラム：
Part 1　映画製作者とアリ研究者の対談
Part 2　映画上映
Part 3　パネルディスカッション
講演者：モトキ　シンイチ（監督・プロデューサー）
阿部　真人（同志社大・文化情報）
尾崎　まみこ（奈良女子大・共生科学）
土畑　重人（東京大・広域システム）

◎共生科学研究センター 2023 年度第 3 回
臨時セミナー（共生）★
日時：2023 年 12 月 28 日（木）
場所：理学部アクティブラーニング室
およびオンライン（ZOOM）
講演：「プログラムされた細胞死　動物細胞と植物細胞における共通点と相違点」
刀祢　重信氏（東京電機大学・理工学部）

◎第 1 回未来共創ネットワーキングセミナー（共生）
日時：2023 年 6 月 9 日（金）
場所：奈良カレッジズ交流テラス
およびオンライン（ZOOM）
テーマ：「気候変動問題とセンター /NASO の活動」
当麻　潔氏（奈良ストップ温暖化の会　理事長）
コーディネーター・司会：瀬戸　繭美（奈良女子大学）
コメンテーター：村松　加奈子（奈良女子大学）

◎第 2 回未来共創ネットワーキングセミナー（共生）
日時：2023 年 10 月 30 日（月）
場所：G302 およびオンライン（ZOOM）
テーマ：「奈良県初の「J- クレジット」森林プロジェクト登録の経験から～地域で育む森林～」
杉本　和也氏（杉本森林総合監理士事務所：天川村にて活動をされています）
コーディネーター・司会：村松　加奈子（奈良女子大学）

★があるシンポジウム等はヤマキイサロンとしても開催しました。

編集後記

2023（令和 5）年度のニューズレターをお届けします。コロナ禍もほぼ終息し、各研究センターの活動、特に学外における活動が活発になってきました。また、シンポジウム、セミナー等も対面で開催できるようになっています。多くの方がどこからでも参加できるオンラインによるイベントと合わせて、コロナ禍以前よりも活動の幅が広くなっているように思われます。来年度は、高田新学長の下、紀伊半島をフィールドとした研究活動が、ますます活発になっていくことが期待されます。（高村）

制作発行　奈良女子大学　大和・紀伊半島学研究所
編集者　狩俣　順也　川根　昌子
槌谷　けい子　高村　仁知
連絡先　〒 630-8506　奈良市北魚屋東町
Tel 0742-20-3762
担当事務　研究協力課
URL　http://www.nara-wu.ac.jp/kyi
e-mail　ky-i@cc.nara-wu.ac.jp